特42
442

竹生鴻
朝長
姨捨
柏濤
沁の潭

六

東京圖書館

和書門	音樂類	函	四七	架	二	號	二二	冊

東京帝國大學圖書館藏

竹生嶋

竹生嶋へ參詣ありて竹生嶋にて
杜鵑を聞き遠喜の元
代よ仕へ奉る下也。扨も江州
竹生嶋の明神へ參詣奉る所
作岡此度参詣ありて竹
生嶋より手形仕り候。四月廿日

原に宮市まうやきぐ〳〵ぐるを乾井
の水の月雲くるゝ代よ逢坂の関
に宮市をとうぶ。都をさ志うの
まよ浦まの浦よまをもをきとり〳〵
年内
志の狩よ浦まの浦よまをもをくれ
をとんきに釣舟のまをの浦。皆相まち
侵船をとうや。面白や比へ

海れ打も 震をわる郭ほまを
長岡より角ふ永の道ぶさわをとな
紀ぶる 見に浜浦屋よをを訪て
明音をとうをうの数を重
てををうをぶたをきやきんと使人
陸を浪岡より明うわて世をわる社

行生

おうきゆう　よりて同じ所にあり
世よりおしうみの洗海のうらに名所多
きはくよう　浦山うまれて泳きは
志賀の都　花園昔なりしの山桜
芝野の入江　ひろまりひさかた
よりて今とたんくめりよ是
成母は侵船　是海

舟はてを多　ひろ久釣舟みるくはよ
平
引
ても釣舟と　ひて久社侵船と
ゆうと見て行　生潟よ初くまを指
れ者多り　桜の舟よ堂つき也　宮洗
有ハ霊地　て歩とたてひ給
人とかくやはち心も違ひ
弁当もつり　はちくれ舟

をまつまを　宇佐
蛭や拙の宮に舟
のりれかと笑てたり　きよ川殿
長岡のくぼよりくぼ　名社
ちの浦や志賀の浦よりたてる八
都人の痛りや　荒れ舟よりて浦を
詠め給へ　有い海乃よ　興
あつまのはまをきくぼのまつや

花ちるまつ白雲のかるう弱るう舟
ちるぬ山吉野の冨ちやまぢちし
うつる春の日よ法良の根原吹とて
もゞ沖漕舟よりもつきゞ旅れ
の思ひも雲井れよそよ人
もゞおの舟よなれ浦と隔て行
狩よ行生鳴もみしたりや　緑樹

陰ちつむく月の光のうち色あり
月海上ようつむしてうちも浪を
さゝ波の面白の海のきさや
船うつひくはあうと人笑うれや
頓て神前へ参り人〻 洗厨の道
たゝへ中ちもたゝまくひ見れ弁当美
ゆくゝ能出行会へ 宇治 宿なるより

もいやまちて宵過つかきや
お浜鴻ハ女人禁制と社頭て作よ
ぶれ成女人を行とてしまきくそ
うきをちあ人れ山ゆうみくぶれも
浜鴻ゆ九生れ来のはさいを母れ
ぶよ女人社まる人きき 旨 ありうき
近もさまを 月 弁当天ハ神みて

ミヅ　其神徳も有り難く天女と現
しをうませたり女人として萬の物に志
らぬ人のことなかりウカラ悲歎をなし
て公員年ひたすら出つるうち上ニテ
古へより利生愛度をつくる
加護をなしたる鳴の松陰を傳
よりひろあ風小舟我人間あらひ

元トル、元イヤ下ニ祠壇のヤウ押ひらき殿
元イヤ下ニ入をうれしき元イヤ弱も水ヤ入と
みう白波立海我ハルト元イヤ汐海のヤウ
そと云捨くまう浪入を信者
上此ニ清廉さきうよ鳴動して日月さら
うやきて出端出ることくみて弧
き鈴つかく　月三天安元　松見ハ此

鴻はまとうて侯を敬ひ國を亨ぶ戈
天とゝ我らを也 上 長府宦官の音樂
ゆるく花のうてるぶ美人の月
上地 上 輝く乙女孫ゞをくも面白屋
安樂の舞樂を時るそうぐ月を
ゆうる海つゝよ濱風さうよめい
うたて下家の龍神彫まうり

上地 上 龍神湖より出現してうぐゆそうも
輝く金銀珠玉をかのまれ人より指
ゆるをきゞ方組りきるぎまゝく
こゝ テ
うか 上 大ようり家生安度の拾ゞく
ぶゝくおきそ或ゞ天女のかうを
きゝ有縁の家生出諸教をか
ゑぶが下冥の龍神とあつく

墨をすりめぐらひをあらう天王
宮中よりせを給へ龍神の創
湖水より出て波をきてあ
をしてて天地とつづく大地の
かぎり天地よりかぎる大地のかぎ
ちに龍宮よりそべりきた

朝長

早付

見へ渡る湖清源寺より出る僧か
てひ。扨て此度平治乃乱に義
朝都を出ひらさ作。中ほど大きを
朝長ハ。の國ありてかの宿ふく自
宮一巻ふるる由形。我を朝
長乃伝ゆりて去をを狂ふ。

所よりも歩跡もとも見ひやさまと
思ふ立くれ（ゆうや）を江路や敷田の長
橋ふる渡り（ゆう）。行きぬ鏡山
曽の森を打ふる（ゆう）まよ伝ひの山風
つ吹く風路をふる行あるもいかに富
ふよきりく
歌よりも侵ぬ
芦跡とよ杉門
（ミシテ女ヒ）見ぬ

たかの長者ゆてゆ
ぎりかさの乃たらひ
あるひなるよ見ハ
歎きをオ乃ふ
おやゆ油乃花簿
乃ぎも歩ぎ汁
うえ乃歌を惜め

上ニ云

かゝて雲の中にたゝなはりうつ
くしきもの〻ふるまひ今はかぎりや
とおもふにいとかなしくて夢のやうに
なりぬ面
影のみしもさそひ給へかしとて
袖をかたしきもやる
ミヤ
ツ
ヒ
ヒ
ヒ

行基と申者うしひしかぶきを有て
山脇行ぶやナ年より鎖しが様乃
姿をあらして仏どくまを五十ば所吊
ひゃ家ひつまき尼。悪敵のおそりをハ
出家乃身をもゆくさひ掛掛行所よ
身をやつし歩ひてを向仕くく作
佛をえわさたる御剃ぶらうハ思

食をもめぐらも一夜乃庵宮ぶ
ぶく自宅ハ長行ハだく身ハ欲さ乃
とくとくが様ハ吊ひ桑ら珍作
実病りや我どもくもどと三後乃
安楽院ハ三世乃仏僧 女房 童も一樹
乃陰乃宿ハ他生乃縁と申ハ時ハ実
見とても二世乃契り ハ 甲丸 まきも

ミニ、朝長

ほよ寝よきく　女　吊し釣も　冪　朝去

上弦　九

を　死の縁の有もあひよ行度

かのウ　跡のきく　陰の　陰の　冪

登り　尋ね　名のり　て　古墳の　草

中　元　下

ぺ　れ　秋の　茅原　枯れ　やき　多

下　元　元　元　元

跡　と　宮　北邙　の夕　煙　一筋の　雲と

下　元　元　元　元

あ　き　宮　色も　形も　ものさ　跡

一　元　下　元　元　元　元

子鍾馗金見るや後ぷつりと頼を打ほ
しあれ明おハ行和よりまの面乃うつを
へ出給ふ人きとせ又弱長ハ都大崩よ
てひさの口をみて和貧どうく煩ひ給ア
かおそ人幹まうく行弱長れは聲
みて南元阿彌陀仏くと二声の行よ
鍾馗殿と手ひ合ひ弱長乃は自富

ひとナさ貧行人ハ義弱ア者さ御流
きれハまはりきあも行ようこうくめを
あくらきぬ有根あり其時弱行
とて自富一きるそと行ハ弱
長ひきれ下よりさ母ハ都大崩みて
ひさの口を対さ也所よりきてひを
馬よりを見まてハまりと也今ハ

一元亨日記抄に踏みて捨てれば
ありぬべき事なれども人々に
もてなされ給ふ加様なる成
り行きぞ思ひ知らるる者也
食はれんまれ世みちを敵に身
なれば朝長の事なれば余りに口
惜しく人々に申さるる御給へ事を

下

見せを家朝に知れ家を敵にきれさせ
給へ義朝面目とりつきて歌せ給
御ある様なれば上方に入るめも気きれ
いつる長れ中ちかやうちとも
もまれ意度の朽骨ゆるその今更
よあり。さて其色を尋ぬれば俗
亡骨とあつてこそ者を定よ

三世十方の佛陀の御誓を儒童心
あるあるは亡魂幽霊もけうそ姿
と思つゝき　カウ　夕陽歌うつる
雲絶えゝ行方の書かの嶺の
く彼樣人を伴ひ宿よ頃
きもく　女　僧よりも見苦敷
皆是よは遲遲ひく郭長もあと

平　市心去つゝ吊ひまもせうれ作へ
女　誠よは去者かゝ作皆是みゝ
平セル　誰り有るもく僧よりや仕へ
扨も幽霊朝長乃紛ハ樣ゝ多き
平　れかも　亡者の貴て給ひ
上ニ云　観音樹法遺ゝくまつる　出ニ云
や法乃山内月まきく　ウ　ゝそやハ

らくさしよう。職をさまし鈴鼓時
をうつるやはおの乃鐘。音をとゝ濃る
れかゝる乃法の法拝感涙をうゝ
くりの。乳色ゆ。

世あり

の慈法やお。貴在灵山名法華。今在
西方名阿彌陀。安楽示現観世音。三
世利益同一時。まゝとあるゝ城なる

地

ハ。上カお。頼をやゝ。ハ妙なる法の声色
五人ゝ三点

地

墳と 地 上 心耳をとゝ面をる。玉文の殯風
感意所よめいをるれかゝ 早苗 ゝたゝ
とゝ月ひや那 赤上 ゝさやお観音
慈法色をみゝく燈の陰。幽なるゝ。正
妻みをハ明長の。影乃ゝとくゝ見て

[illegible]
[illegible]
[illegible]

クリシテニ名ニ
やく　失弱ハ紅紙ありつく世路
よりうの弱とゝ人共ダよハ白骨とあつ
く郎ゑよ。朽ぬ　七ツ三保平長
みつく。朝家を守護ハ代を
治め國家を治めく萬機のまつり
ゆきれほゆく。保元平治乃世つ
ゝれ。ゆ歳付う来りまゝ　思ハ切り

十

ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ弓馬のさりさ。ゝ時分ゝ来
ゝクセ。ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
なりウヤ出産ハ嬉ハ悪縁大義平治
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
出寺よりきりと。多勢ハ母勢叶ま
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ハ。ヤア。ハ。ヤア。ハ。ヤア。

蒼ひさ長田を頼、給へ彼子を求乃
ゝとは雨そらくゆくと詩き給
ぬ。いかまきい長田はひとひとあて立
君を。討もなうやあれ洗宮れ
おうしいたうもなくしくもも
頼まわく。抜世情のうかうもの跡迄
ゝ法師ひよ成うも世乃

嬰ゝうや。一切乃男子をうまれ父と
新萬乃女人を生れ母と思へとも今
才のよ成ゝれうさ親子乃
ゝくよ声歌物ひ法師ひも成よ浮さ
ゝ請ひ成ひ朝長ひ生まれ
出男く思せ宮殿へき一事のぞり
きあうよなとされ嗔恚乃甲冑

[illegible]
[illegible]痛りき[illegible]梅弓本の[illegible]
[illegible]ふ[illegible]まりぬ[illegible]ハ善[illegible]よ[illegible]き[illegible]ハ[illegible]
[illegible]修[illegible]道[illegible]ふ[illegible]て[illegible]ハ[illegible]くら[illegible]ら[illegible]を[illegible]る
[illegible]り[illegible]ハ[illegible]苦患[illegible]ハ[illegible]の[illegible]敵[illegible]
[illegible]ひ行[illegible]乃[illegible]世[illegible]て[illegible]み[illegible]て[illegible]ハ[illegible]
[illegible]年[illegible]家[illegible]入[illegible]乱[illegible]ハ白雲[illegible]
[illegible]乃[illegible]敬[illegible]ま[illegible]も[illegible]戦[illegible]よ[illegible]軍[illegible]の[illegible]極[illegible]の[illegible]
[illegible]さ[illegible]大[illegible]崩[illegible]て[illegible]引[illegible]ま[illegible]ひ[illegible]さ[illegible]乃[illegible]口[illegible]を[illegible]の[illegible]ハ[illegible]
[illegible]射[illegible]ま[illegible]く[illegible]馬[illegible]の[illegible]ハ[illegible]ら[illegible]と[illegible]腰[illegible]ハ[illegible]ま[illegible]ま[illegible]ハ[illegible]
[illegible]馬[illegible]を[illegible]頻[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]鐙[illegible]を[illegible]て[illegible]ま[illegible]
[illegible]ま[illegible]ら[illegible]ハ[illegible]ま[illegible]ハ[illegible]ま[illegible]も
[illegible]ま[illegible]ハ[illegible]ま[illegible]ハ[illegible]ま[illegible]ハ[illegible]ま[illegible]て
[illegible]ま[illegible]ハ[illegible]ま[illegible]ハ[illegible]ま[illegible]ハ[illegible]ま[illegible]ハ[illegible]

[illegible]て腹一文字[illegible]切る。其後[illegible]
[illegible]を[illegible]ものゝ[illegible]
[illegible]ひ給へ[illegible]
[illegible]

嫉妬

[illegible]月[illegible]
嫉妬[illegible]を[illegible]
[illegible]
更科[illegible]月[illegible]
立嫉妬[illegible]
[illegible]

乃月し言て行方よ寝そなるよ
にて受科や姨捨山よ見よきりく
拙も我姨棄山よまてこれ見た
いろにて萬里雲も隔なくよ
里よ陰あさ月れおさてそと思るやう
れてゆめ様洲有よやもとひと
雪乃月を詠やと思る三夕安行
あるく

あまを成様人行るを行う平内
ゆ見人都乃者ずくゆ初て洲有
よまりてゆ拙も出えいつくよ住
人ゆ女是人洲ゆ新屋よ住者
みくゆきよ人名よ行よ我ゆあるゆを
男を見く月乃名ゆよ照よ天
乃底陰あさ雪方の氣色ゆいに

と霄の月の面白かりしを覚へ
ぬ
ちらすなの人はてまつりやう
古姨捨の花
をかまて山の法師
もあ我心慰めはつちすあや嫉
妻山よりの月をなんと詠きし人の
跡なつかしき桂のすの陰社

昔の姨妻の其あき法ふく人とよ
ぬ洗すの陰ふて捨とうれなつ人
の法花 其まう去中よ堀草ぬり成
世とてとうやう 昔語りよ加人の
ぬと執心や法りきを なきあと道
をいとと加法 おもきあきこの
原 風もうよちを 秋ふろ

上方

今うとてもなつかしく

あやぐさとなる山乃夕雲よ

うつるまし哥すがたも

てれつかちやうちうく山の

霧もこちわたり冷く雲さ

てはひしき山の氣ふかく

女行

樣へいらくうつ来と鈴うう

上方

けりまへとおもやてくく都の去をて

ゆう更科乃月を見なが姫く洗所よ

女

まりてんよ拙乃人みてま

まひうやばりうへわうりも月と考よ

野ぎ出とく樣へ夜遊を厭めヤ

へし

平

ちやうを遊をなくさめんと

ばなへ乃ヤ成へやらを

女

成を我へ

浸科乃者　平虎

栖といたんへ洗山乃
とへもてて乃
うやゝ〻墓古へも捨られて
とり洗山よりを月のうの秋毎よ
捨乃間を青ちんとど雪あられ
ちとり陰れ木の本よかきけ

をやうよりちんく　平上馬　夕かを
ちる月場乃ゝ〻ぐや出そめて面白
や萬里の雲も陰あるていつの秋
も蘭なき忘もすそ袖もひろゞ
五夜中の新月の色ごろの外の
古へのろう　蓋面白乃打うや和
ぢう面白の打うや明なまの秋半

もらぬべしどこ霜月のたきつ
かぬさもあきたりよ秋待ねてうらび
ぬるさどんどそらの月のたりたりもだ
ぬしぬるよ陰も物さ姨捨山の秋乃
月何よ堪ぬ心や首とたりも思ぬ
うや　平　みしきやなきや愛るる月
の夢よ自哀れ女人形き待よ夢う

現うつ東か　女　夢とは物やうや言
よ形れ出り　平　君乃姿ぞうつ物紅
葉りたり　平　仁ぞうつ陰ぞ花ぞ
より何も姨捨の　女　山ぞ陰ぞ仁
ぞ何乃　平　昔よ陰ぞ月よ　女　月の友
人まとあて　平　まとぞ　女　花よ
起所独の露乃　二人上　山ぞ色て乃友

遊の人よりて訪ふやうなる
盛りをたづねて帝花乃ウ花や
去ほうれくヤヤ
ものをたづねて嫌業の山より出る月を
愛科の月よりも恋しやヤヤ
何ものも見ぬ世の中ぞ思ふや
ヤヤ
ぶが苦よ花よめて月まうて遊ん

クリ北
宮や鬼よりひろひて
まりもべりれりとたづねて宵
の空の氣色や
ぶくいあきと愛科や嫌捨山の雲ら
あさ一輪てる清光の景風
て海毒をとあるる
誓ひ仏き勝苦あ超世の悲

教善きをば法花経よりはじめ
名をば十六観経と云ひ
西方をば阿弥陀仏と云ひ
此等の経の脇侍として
導きの師をば羅睺羅
力をば文殊
天冠の冠をば
臺をば浄土を
樓の風の音
ひるがへりもとをば
寶の池の
花ちりて
迦陵頻伽の
てをもをば

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

行て見ると市吉息絶えぬ。同家在孫
余ちく居合せ乃ち父子乃ち別れを歎
ぜひいつ迄も南無阿弥陀仏と唱へ
花ちる乃ち法師笛の音を聞くと共に
ぞ故郷柏崎と思ひ出ぬ
さ目覚ぬ夢や覚めぬ夢やと
眺へ雲の去る。一面てみる村肝魂
の門を出て行く。神さへ増る指宿雄
氷乃涙うるうるして。都なる早くぞよ
きりく。立ち狂ふ故郷柏崎よ
て仆ぬ。葉尚ぬ中ぬ
ぞうよ。鏡会より小太郎かまり
くれたる法中入仆小太郎と
ぞ厳乃法師ありける。言めつ

や行くとおもはぬそ　男
迎に来りて入れ　下　仁　と申上へきや
ここ、ここ、ここ、ここ、
場所受よ思ひもわきまへぬ　女　あり
応えあやおもはいやはきさめくと言
拙花若う方よおるようる　男　はち
作花ふ公御通世そて居　女　仁と
花若う通世去ふ仁公吹ちら

きるかおもて迎手をなりきりしそ　男
いやを様ふも出産はあく様ふの出筐の　女
おを持くまりて　仁様ふの形見
と仁仁公花若かの文の通ふ公
洗濯ひうかの　下　ふ　も　く　仁　便も
嫁ひかりつるよ筐をとくるを仁
中ふ文ても恨めりきそや　下　仁　俄初よ

立ちく。猶てしひひ長い　下ロ　昔
語りよりや中く笹をみるう源氏物語
上ロ　女上　ウ
拘や家明の打節へ。わらすか宜
ひく。毒く語り。おりませをあく色
下ト　平下
きひく慰まん　ゆ故郷の法のを
笑東なく思ひ。宮物語を人去れを
下ト　女
ひうかよ声疾みる也　言やさそへ

松ひひめ三年嘲く長なへ。我も法
名法の世ろへ長くへき　ロ平ヤ　ハ平ヤ　ハ平ヤ
里へ丸歌ととめあてりまり笹を正発
下ニ　下女
人へ宮や歌てくもひまさ世とへい
ヤハ
明ふをみうりまを消をきあへを
ヤ　平ハ　女上
花ろ改乃ハ人の色を正発人　拘も
法も父市前痛りつを信狂あく

苦く修行へ心の中にさへ思
ひやせ給へ我も捨てはかり捨べき事
らを度さんと思ひ立める修行の道
やとめ給ひけんと心を使ふく心
つくもなく命幼くして三年
かうらの美しく樣の姿を思ひて
涙と暮さたりませとひたすらの

恨めや　あるべき母父子の
形見方へきろ　父ろいろあまに
悲しき涙行よりまるものあるやはまく
ろ母よ涙をみえと思ふ心のあり
おもうめの我みやうこ時に恨を
あるもちりとそ我のゆるを安穏
ふ寺せ給へ仏と祈る四そ成く

僧行

加賀の者に信濃國善光寺の住僧
みくじを見て渡りに人につかはせ
愚僧を頼母子仕行程に即急の契
約をなし此程出家をしていた岡毎
日来堂へ住ひ今自をゝしまらへ
やとゝ見れ　見て成童部を行を
わるこそ何あるまいとやうして

やをあらん人を訪ひて社をゝきれ
ぬれをいうにとゝるよ妻よいたゝて留き
ゝ獨居れ笹たとゝ　上北　たにまつ　ゝ　ゝ　ゝ

昼も偏よ妻やもよのぷへと里へ根めりや
うきみれ行とあるうちの柏湯をい粗
ひて　朝ぬうの舟よ見るうぷへ
めもつあ秋迷いつ也ちよいつまるく
やぞ考ぬ心あるさ長ちるくとう
狩よ松風をくきひきい学盗の里
のタうや我よ考へるく気あるい洗ち

とぞ故よ多をて加へのきい海
の里とうやぷまち稚ぬいを言う
ぷさのとうの昼くとよ桐の記咲井の
ようぷを東よ見て夢へ貴へ善を
寺ぶ乃浮物づ粗乱い拙直め
ぷてあー妻もを引おうませ
僧問
めりよ粗寺堂の門陣へ叶ぷまるそ

ゑこそ出て　女房　極重悪人無他方便ゆ
称弥陀仏得生極楽と社みしられ　僧　見ハ
ゝ　ゝ　ゝ　

頼政公、会伝をよび、後会仏はいかや
ゆさま　女房　いうこゝは、如来へ、まゐせわの
作法をほしひ、ゝれ。あるを書の筆
あれ、若形、社へ、あるあれ、見なくい
長く、陸もあるゝ、おもてどうみしも
男、初またゝ見、如来よ、まゐまて書
乃仏生書有、も、祈りもやと思ふ

上　蓋いとゝや法をほ　直家の主に　萬
仏ようけて、も、鬼、ひ、ひ、三物、や、流
を対うゝ、ゝ、連歌乃、面も、去ル
しとゝ、ひ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ
よ、乱、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ

[illegible]なすゝ離の水　ちゝ一人会稀なんの
色の中よりはぐくむ月をまねぐ花菜
[illegible]の雲のよゝ　九品蓮臺の花ちらして
北
左上
中
[illegible]吳香満てゝ　虹地よ満て
つゝかきり　情世間の幻相を視る
[illegible]飛花落葉の風の前よべうゐの物
哀とゝりゝ電光石火の影のうゝよゝ

ず死の去来をみる事。始て驚くつゝ
よゝあゝねたゝくよゝ夢やまとゝうゝし
俤の親子のとをたゝぐひ星もきゝあ道
きの露のうゝきゝの直可　[illegible]よゝ
海し橋の道昔もうゝ世のおゝひゝや
名
悲うゝ涙眼よ慶ゝとゝの煙陶よゝう
情昔をまゝ夢ゝ三界よ流れてゝ人

四の妄執の者雲のうち月のかを
やかくれ真如の日輪とたゝもの
歎くして煩悩のうちに結ぶまゝ
うゝ罪障の山高くして苦の海深
しいうとして洗はんを深く
とゝ歎きとも人間三日意三乃
十の道おほうき　けまくそ

法はゝ三界一心ゝ心外に法
仏なし衆生と仏対ハ三無差別行説
まうへきや記乃法花妙の浄
叩へくハ尋めへくハ法華の蓮
のうへとなりたちたゝ見ねうくハ
歎願ゝ色と力の助船こうねの岸に至
留へし作業と拾ゝ教あまこよ生

れイ。貪欲の品あれや。寶の池の水く
とくちの濱の玉砂。数の玉の家。量も
ふくの樂を極め量あさ命の伝ゆへしや
ぞ我が伝十方入。常成へ。上女上上上
誤りたくはの抑かねうつさ。書の
ゆくえもとも雲のたかひく山や西の方
の仏国よ思へつ。うつ浄土の縁とあり

十

ちとを呼へしと。称名も鐘の音も
曉うきて燈のよ。ぶきえてあつくあつや
南無経命。法華ねひとあへ珍や
久へ行ちつ。昼仏法の花
と云みもと。女上抑ぶとぶへ仏
ぞよ堪うめ。夢と計思ふ。仏きう
抱もみ。三昧 北長 共ようれと人思へ皆

相伝

姿八雲清き国にあらぬなれ
妻籠もうつあさ　社へとらひ
衰へとらひ　ほよあさわく　ぬるうぬ
よくこれ　乃島やをやはまくく
きすかわとへ　みてあもあと　社ぬ
ちとともや　疑ひあさ　乃ちや
子はあ　社姫　ひうきまく

門漕

つくしの門　あくまの
月そもあさ　見立九州日向の
国の出ぬ　社伊勢大神宮よ
しまくにたりよ　男立て作
ふり　月よ向国の浦あて　ぬ宝
乃塩路をうくとあう　後路

河漕

ニ付

町ノ通ヨリ長ク色ヲ付テ樣ノ寢ヲ
ヲ下ニ
ヲシ風ノ通ヲ其ヨリ奥ノ戸
漕ノ浦ヨリ吉ヨリ
行
長ク出ヤリ出セ乃國ノ郡トヤラン
五作行ヨ
ヤハ皆人ヲ待所ノ名所ヲモ尋
セイシテ
ヤト思ヒ
ハ有テ
ホヒ陸モ
ヲ
有ヲ風ノ夜ノ
ヲ乃有キ作ト限

一行ヿ サシニ

ヲ
ヲ大世ヲ濃ヲ有ヒ我一人ヨ
ヲ
ヲ
ヲ

寿ヤ人こそ[ニテカ]世方の下りて
仏か行すまうくいそ[平]伊勢の国よ
とりてもぴ浦をいめ成行と
仏そ[シテ]さ[平]此所を月門漕う浦と
ヤ[ロキ]梅を家ゆうあこ記うう
ゆうひきうやさきよぷきう海
あこまう浦よ[ト]引綱を度かいあまい
頭がきぷ根よ讀きう浦あう
うや嘉ぎしうやん[ニテカ]あうやさうの
根人や所の和歌あれいなとかいさう
てうさぷ嘉帖う手ア海[ト]ぎすを
あさ[ニテカ]浦よう綱を[ニテカ]かいさうう頭
まやきんが根よ後ぎあ人あまき
ぷりを口おきいせをう海のうめう

里程カ
うつきの月まれにて歸ることあり
宮やゝ有日跡よ訪ふ年々を心あさ
シテ　ワキ　シテ　ワキ
ゆ風乃たゝまうクタきつり　身を
シテ　シテ
くつきまハ有ふ　すあハ有ふ
ワキ　シテ　上音ロ
波乃　音もかうう　岡絵へ　物乃
ハル　ハル
名も有ふ　く替りきゝ　紙
ウ
乃戸乃浦ハ　濱
ハル

ハル　ハル　ハル　ハル　ハル　ハル　ハル　ハル　ハル
蔭乃ものうく　ゆ絵をほ　煙
ハル　ハル　ハル　ハル　ハル　ハル　ハル　ハル　ハル
を入ハ絶ふ　り月ふ　あま
ハル　ハル　ハル　ハル　ハル　ハル　ハル　ハル　ハル
のわきゆ　ゆ風ころも
ハル　ハル　ハル　ハル　ハル　ハル　ハル　ハル　ハル
鶴　ふ　ふ　ふ
ヤ　ワキ　ワキ
乃紀　汐うを　あこき浦と　謂
シテ　ワキ
ふ物語ふ　物　ては滿をあこき
ハル　ハル　ハル　ハル　ハル　ハル　ハル　ハル　ハル
う浦とハ伊勢乃神宮乃陰より

此ごろ法膳湯をのの綱を引可也ざれば
非乃浦拾ひよりうるまや海島乃うら
をつ山可まをくあつまるよりて浮
世をうるあつ丸姿人此有よりを
おとりを望山と人ゝ祈前乃恩首
により吹くいまつめて見をゆるさぬ家
よりてきと云あ面人ゝまたに京也忠

乃中さ為ゝく悪ゝく綱をひく
おりゝ人ゝをもつまつ度富か
まゝ頭まくゝあつゝ知をいまつめ可を
ちうゝ浜浦の沖よ深めまりさ日ま
たよりをつめまゝ罪深くさゝを善
ゝの海乃ゝ童子切さ罪科を文
ゝや冥途うみちよりを　ちやうの

名ばかりにあらずとあてきりそめしやが
しもの貴き陸奥なれば苦しも度重
なる寵命をも給へやうりやいふく
を語れもあまりきこえぬうきこと
なるしるのおもてあらうの色そよ
錦なるの牧積ふる東の都り君ふる
はこれのたくへうきなるつ則清

ゆえ〻昌子人の忠妻ありきくと
ひきんも貴一人よ有宣ありうい
れきう うつやは依る幽霊の紅
かゝ頼まくれば執心の浦なる氣
きる値遇うれ 一樹の宿りとも
他生の縁と風物をも前の世
宣値遇をもつて松陰よ浦 まう

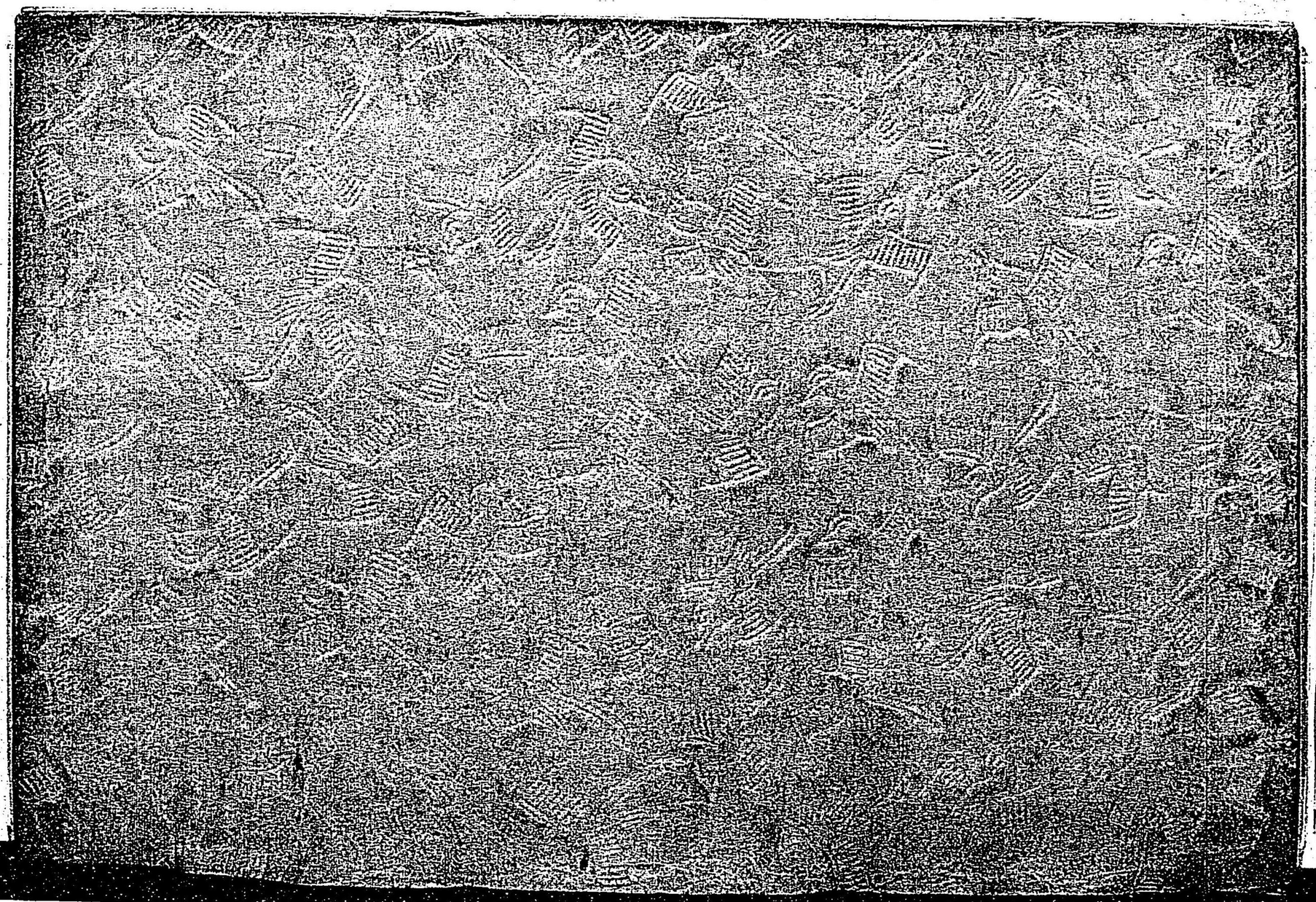
なる雲衣　日もくれ暮の塩煙立そよ
ぶるや漁火の　陰をほのぼのとかすむ
そて海邊もうす村雨よ　もとゆ
手繰り　めうつ　ぶりをうつ
なるうきぬ　もつ　ようも　俄
よもやてみぶうつ　暗く　吹き
ぶき　漁の　火を　ゆう

せて　ごうとしの　いとときを　聲の
波よりうつて　ありとも　ぶく
ぶよきりく　いとよりうつ　ねを
歌　法華中　一章乃　ぬ　まで
夢ひとり　ぬ　ぬ　人
終て　ひとり　ぶく
ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ

笑を拡あつめ世間恨うつ今長
もとし浪あまて暗の執乃網は
まひくれぬ月の陸あり
夕月あれば青やうく入堀乃
中元もうへ人めと悪くよ乃網の
沖みし深みし水上の秋の
そあこの海あこ地乃堀ホうきて

北元 執の網もう女 伊勢乃うら清
き渚乃風くし社をより
法乃うち耳シテ 耳よはきけ我正月は
上元 罪もうこ浪きの浪つ
く猛火とあうやあつやだく
上月 ウ うこ長乃夢く
ぱうや 月の夏の火車よ

葉つゆ、若くめく日の光の地
微も泳ぎ、きこと、ぬるるきき
きや「思ひもうるはしいみ入く
きやうの命、ぬるるこきぬ、ぬるよ
と執心のぬるくあと沈うろ
うと、ぬるく、悪魚毒蛇とあつ
く、紅蓮大紅蓮の氷り身をる

め骨折くきはさけ息、焦熱大
焦熱、焔きり雲霧、ぬるる
陸もあさ、冥途の責も、慶童ある
あこ、ぬる浦の、罪科をひきぬ
屋形人よぎもけ、やたひ人と
てまぬ、ぬるり入、よきりまあ
度入ぬる

右之本者觀世太夫織部
章句眞本令版行畢
正德六丙申歲弥生
天保十一庚子歲孟春改正再板
皇都二条通御幸町西江入町
山本長兵衛